

序章

2005年7月ロンドンで発生した同時テロ以降、移民に寛容で、人権を尊重してきた英国が出入国の厳格化や拘束期間の延長などのテロ政策を通じ、“外国人”に厳しい国に変わりつつある。たしかにイギリスは多様な文化背景をもつ人々が共存する社会であることは映画や旅行による短期の滞在などでも確認ができる。さらに最近では、カルチュアル・スタディーズ等を通してマイノリティに関心が向けられ、英国社会において多文化社会であることの認識が高められたことは事実であろう。しかし、この移民に寛容であったとされる社会で、多文化主義的思想は一体どれだけ一般の人々に浸透していたのだろうか。イギリスではヒューマニズムの伝統が知識層の間では守られ美德とされてきたのだが、実際の一般市民の間では移民に対しては激しい差別が氾濫していた。大量移民流入という深刻な歴史的背景が人種差別という否定できない社会問題を生み出すなか、伝統的社会通念の維持をいかにして実現していくかが大きな懸念となった。例えば、イギリスは80年以降には多文化主義を一般市民の教育現場で取り入れ始めたが、教育を含めて人々の内面と生活の実践に未だ階級制度が色濃く残っているイギリス社会においてこの多文化主義とはどのように機能し、またどんな意味をもってきたのだろうか。

80年代まで、映画や文学を通して、大英帝国の歴史に関わるものや、一般市民の生活からおよそ遠い生活をする上流階級が描かれた。イギリス社会において階級の区別は暗黙のうちになされてきており、各階級内で自分が属する階級の位置を認識してきたため、階級社会のイデオロギーは簡単には拭い去ることは出来なかった。その風潮の中、イギリスで著名な作家や監督たちは労働者階級を描きはじめ、小説や演劇、映画やドラマにおいて労働者階級が表れるようになるが、一般的には彼らはほとんど声のない主体として社会の周辺に位置づけられてきたのも事実である。それは仮にメディアに表れる際にも彼らが労働者としての最下位としての位置に定住するしか生きていく術がないという否定的なメッセージと結びつけられていたためだからだろうか。しかし、近年そういった社会の底辺を映し出す労働者階級の映画に変化がおきている。80年後半以降、今までの上流階級イメージと並行するかたちで労働者階級を描いた映画が国内外でヒットしたことがきっかけの一つとなった。

その背景には政権交代も保守党から労働党への政権変革が少なからず関わっていることは事実であろう。しかしそれだけで社会の底辺の個々人にまで浸透するような即効性は期待できない。このような意識変化が可能になるには伝統的なアイデンティティを揺るがす

移民コミュニティの存在が、労働者階級へ与えた影響を移民たちの創り上げたポピュラーカルチャーにもとめ、イギリスにおける多文化主義の創造的な意味合いを探るのが本論文の目的である。90年代に続出した労働者階級の映画には、移民たちがたどってきた歴史とその実体験の象徴としての移民文化からの影響を垣間見ることができるのではないかと考える。

本論文の中心的論点は、イギリスに流入した移民たちの歴史と周縁化された状況が労働者階級によるアイデンティティ構成のモデルとして機能したとの見解からなる。以下の言論では、その関連性を映画分析によりあきらかにし、イギリスにおける多文化主義が移民文化を通して労働者階級の人々に浸透していったことを検証する。

移民の意識変革と独自の文化形成は、労働者階級共同体を解体に導くとともに、伝統からの脱却を促した。なぜならば、移民である“異文化”との接触が、彼らに今まで培ってきたアイデンティティへの疑問の機会を与えることとなったからである。その結果、労働者階級たちは移民たちを新しいモデルとして、他者性を理解し差異を取り込むことにより、自己再構築を実践し始める。これまでの否定的なイメージに甘んじるのではなく新しい位置づけを模索することによりもたらされた自己変容の要因を「多文化主義」概念から探る。

以上を踏まえ、第一章ではイギリスに流入した移民たちの歴史と彼らの置かれた状況とそれに対するイギリス国内での反応と多文化主義への変革意識について考察する。第二章では、移民とイギリス労働者階級の境界と移民がいかにかに表象されてきたのかを「マイ・ビューティフル・ランドレット」と「秘密と嘘」という移民主体の二つの映画を分析して解明していく。第三章では、90年から変革してきたイギリス労働者階級の映画の特徴をあげ、労働者階級として代表的な映画「リトル・ダンサー」を手がかりに、異なるものとの遭遇によってアイデンティティの変革がいかにかにして促進されたのかという過程を分析し、現在の英国の多文化主義における移民文化がいかなるものかを考察する。

I. イギリスにおける多文化社会の背景

(a) 非白人移民の流入とイギリス社会

イギリスにおける非白人移民の大量流入は、第二次世界大戦後、多くの植民地が独立し、新たに英連邦として組み込まれる過程で顕著となった。西アフリカ、カリブ海、香港、インド、パキスタン—新コモンウェルスとして成立した国民国家を離れ、多くの人々がロンドンやその他の大都市に居住し始める。労働市場の需要を見込んで英国社会へ渡ってきた西インド諸島人、シーク教徒、パキスタン人など主要な移民集団は、外国人に対し閉鎖的なイギリス社会に直面した。戦時中イギリスに忠誠心を持って仕えた移民を迎えたのは帝国の国民としてではなく、むしろ歓迎されない厄介者として彼らを受け止める冷淡なイギリス社会であった。このようなイギリス国内の拒絶反応に対して移民は心理的な衝撃を受けただけでなく、職業の上昇移動が制限され、十分な教育も受けられないまま日常レベルで差別に直面する。このような心理的葛藤は第二世代の犯罪率と失業率の高さなどの社会問題として形を変え表面化した。(コーエン 2001 : 228)

その後、移民入国を制限する英連邦移民法が施行され 60 年始めには移民の流れは一旦終息するが、イギリス社会の非白人移民に対する不安は増大し、60 年から 70 年代にかけて反移民を掲げてのバッシングが盛んに行われ、移民送還運動をする組織ができるほどだった。

多くのイギリス人が移民に向ける反応は“外国人嫌い”と“人種問題”からくるものである。人種主義には二種類の形態があり、一つは人種、民族、肌の色の差異に基づいて行われる差別であり、それらは暴力や攻撃に結びつけられていた。もう一つは、文化的差別を指し、様々な異なる文化圏から来る人々に同化を強制するような言動や行動を表わしたものである。イギリスではこの二種類の差別が既に形成されていた。(Storry & Childs 2002 : 224-25)

イギリス人が拒絶反応とあからさまな人種差別をする度に人種間の緊張が高まり、各都市の移民が多い居住地で暴動が起きた。1980 年から 85 年までの 5 年間にロンドンをはじめ、バーミンガム、マンチェスター、リバプール、ブリストルなど大都市などで計 10 回ほど人種暴動が発生した。非白人移民の中でも人種問題の中心となったのは西インド諸島からの黒人移民たちである。彼らは他の非白人移民よりもその「肌の色」により周縁に位置づけられ、「黒人」と定義されることによりアメリカの黒人同様の差別を被ることとなった。(トッド 1999 : 183)

(b) ヒューマニズムの限界と多文化主義概念

イギリスは人間性の普遍性を重視する知的伝統が社会一般に広く受け入れられている社会であり、それはナチズム粉砕にも重要な役割を果たしていた。それは、第二次世界大戦後植民地の脱植民地化を実現させるためのモデルでもあった。しかし、この知的伝統は知識階級だけへの浸透だったのか、一般市民の現場では知識階級が予想もしない悪しき状況が展開する。移民の大量流入に対して移民居住地近くの白人住民の間では強烈な人種感情が広まり始めた。1968年保守党のイーノック・パウエルが移民流入を糾弾し、移民問題を先鋭化させた際、74%のイギリス人がそれに賛成した。ここに移民に嫌悪感を示す当時のイギリス社会の現実が明確に現れており、差異主義が国民の間に広がっていたことがわかる。それ以降、移民制限や移民に対する強迫観念は選挙のたびに執拗に繰り返された。

保守党が白人アイデンティティの擁護者となり、本質的な文化の差異を強調することによって、マイノリティはイギリスの文化や伝統の外側に位置づけられるとともに、イギリス人の生活様式を脅かす集団として暗黙のうちに認められるようになった。それに対抗していたのは労働党である。労働党は人間の中に根本的な差異がないとするナチズム対抗の際に唱えていた原則を踏まえ、人間の普遍性という観点から移民規制の原則に拒絶してきた。それを持続すべく労働党は非白人を擁護する立場をとり多文化主義概念を掲げ、1985年以降、教育の現場で反差別主義的方针を推進させていく。イングランドで生まれた子供に対する多文化主義的教育法が実施されるのである。(トッド 同上：169-172)

しかし、この反差別主義は移民集団により異なる政策がとられたため、実質的には差別的色彩の強いものとなった。主要な集団で例をあげると、西インド諸島人には道徳破壊をもたらし、パキスタン人には隔離を、そしてシーク教徒には同化というように、それぞれ異なる移民集団に異なる文化的影響をもたらす結果となった。一方でイギリスにおいては、他国には見られない階級制度が存続しており、その社会階級が準民族集団となっているために、被支配階級層の存在は白人混交婚などにより移民を絶対的な隔離から救う結果ともなった。人種問題と階級問題が複雑に交差しながら多文化主義が展開する英国特有の状況が存在したのである。(トッド 同上：174)

多文化主義という概念は、1970年以降のカナダやオーストラリアにおいて形成された多民族社会を前提に唱えられるようになった社会理念である。これは一つの社会において複数の文化の共存—各民族の文化の画一化を目指すのではなく各々の独自性を認めることに

より共存一を目指すことを是とし、文化の共存がもたらすプラス面を積極的に評価しようとする主張ないしは運動を指す。これは文化相対主義とかなり類似しているが同時に極めて異なるものである。文化相対主義は多くの場合、ある文化と異なる文化との1対1の関係性を前提とし、各文化にはそれ自体特有の価値体系が存在するため、先進国と発展途上国、未開社会に文化的上下関係を認めるべきではないとする主張である。一方、多文化主義の場合は共通の社会的空間の内部における複数文化の共存を問題にしているため、相対主義に基づいての実現は極めて困難だとみなされている。(梶田 1996 : 67)

この多文化主義はイギリスにおいては、「文化」の問題よりも「肌の色」や「人種差別」の問題への固執を助ける働きをしていた。「人種問題」を「多文化・多民族」「多文化主義」という言葉で言い換えただけで、実際には、マジョリティ文化の優位性は揺るぎなく存在し、移民には同化や隔離などの選択を迫っている状況が続いたため、身体的差異化の傾向はより強固になっていった。

では、上記の差別的な考えが色濃い社会状況において、多文化主義はどのように浸透していったのだろうか。実際移民が居住することができたのはどちらかといえば貧しい地域であり、ヒューマニズムの美德をもつ知識階級の人々から離れた労働者階級の生活領域である。労働者階級は知識人の美德など持たず、「他者」を排除する傾向が強いことから激しい反発が起きたと考えられる。しかしそれと同時に、移民との文化的接触を通じ、今まで経験したことのない自己認識が可能となったことも事実である。

重要な点は、このような「他者」との接触によって、労働者階級の若者達が自らの社会における位置づけを客観視し、新しい創造的可能性への意識、すなわち、自分たちの「居場所」としてのポピュラーカルチャーにおいて新たな空間を築きあげる可能性の存在に気づくようになった事である。その過程において、「他者」と「自己」という関係性が中和されることにより、対立する社会状況の「多文化主義」への移行が促進されたと考えられる。

移民文化にそのような変化の要因が見出されるとすればそれは何なのか。以下において、移民文化の特徴として頻繁に取り上げられるハイブリディティとディアスポラについて論じてみたい。

(c)ハイブリディティ(異種混濁性概念)

多文化社会では異質な文化に出会う機会が多く、それゆえそれまでの伝統的なアイデンティティが混ざり合い、新しく造り出されるのが特徴である。この混合の状態を表すハイ

ブリッド性とは、社会理念である多文化主義からいかにして個々人の体験として内部化されるかを知る上において重要な視点を提供する。

ハイブリッド(hybrid)という用語の語源は、ラテン語のヒブリダ(hibrida)という語で、これは、「不自然」、「二つの異なる種から生まれた動物」、「ローマ人の父親と外国人のあいだ、または自由人と奴隷の間に生まれた子」を意味している。この言葉は 19 世紀以降に人種についての理論で用いられるようになる。19 世紀以後も異種混交によって生じた植物や動物には生殖能力がないと考えから人種が「種」とみなせるかという問題にまで発展し、人種や優性などの論議が水面下で続行した。しかし 20 世紀になるとハイブリディティは言語や文化の混交に関連する新しい世界観を表現するために用いられるようになる。例えば、ミハイル・バフチンの言語における「有機的」「意図的」という二種類のハイブリディティはマイノリティ社会の発展をイメージする上で重要な役割を果たした。(戴 1999 : 102-4) ここでは、混交し融合して新しいフォームや新しい世界観を生み出すという「有機的ハイブリディティ」と対立する二つの世界観が閉鎖された空間を広げていくという「意図的ハイブリディティ」の二つの形態が見られるが、この二つが発生する移行過程とはある意味では闘争と挑戦を経て自らの地位を創り上げる周縁の人々の生き様でもある。(バフチン 1996 : 185-190)

ホールはイギリスにおける移民黒人文化での変化における二つの契機を指摘し、第一の契機について次のようにのべている。

イギリスにおける人種差別と周縁化という共通の経験を指し示すために「黒人」という用語が造りだされ、実際には極めて異なる歴史や伝統、エスニック・アイデンティティを持つ諸々の集団やコミュニティの間で新たな抵抗の政治を組織化するカテゴリーをその言葉が提供するに至った契機である。(ホール 1998 : 80)

つまり言葉が人々を結びつける契機になったというのだ。周縁化としての経験を共有する人々をまとめる方法として「黒人」というカテゴリーが生み出され、歴史や伝統を異にするさまざまなグループやコミュニティがこのカテゴリーの下に団結し、一体となりカウンター・ヘゲモニーを生み出していったということである。これにより支配者側によるマイノリティの表象に挑戦し、自分たち自身を闘争する集団として表象していく新しい価値体系の創出が実現されたのである。(戴 同上 : 107)

ここでマイノリティのひとつとは抑圧と差別を共有し経験しているというまた一つ新た

なアイデンティティが追加された。異なる出身地、民族、そして異なる文化をもちながら、一つの共通のカテゴリーに区分けされることにより、多様性に満ちた新たな文化的アイデンティティが形成されるのである。それらは対立や団結などの状況に応じて変化するものでもあるが、この複数の多様な共存こそが新しい世界観をうみだす源といえよう。

理論家ホミ・バーバはこの新しい世界観を「第三の空間」として捉え、そのハイブリディティが異なるもの、新しいもの、認識できないものを生み出し、意味と表象の交渉のための新たな領域を創出することへの可能性を重要視した。(バーバ 1990 : 211)

(d)ディアスポラ

アイデンティティの変化の一因として、異文化への接触があげられるが、それが典型的に見られるのがディアスポラ体験である。このディアスポラ (diaspora) という言葉の語源は、ギリシア語のディアスペイロという語で、異なる様々な方向に種を撒き散らすということの意味しているが(戴 同上 : 113)、近年では移動する様々な人々の経験を形容する言葉として使用されるようになってきた。戦後の各地からの移民であるマイノリティ共同体は独自の歴史と問題を持ちながら母国から離れた空間で暮らしている。先に述べた西インド諸島人、シーク教徒、パキスタン人などが主な移民共同体であるが、彼らはそれぞれが同化と排除、帰属性と異質性、われわれと彼らという境界線での抗争を繰り返しながら独自のディアスポラ空間を形成している。ディアスポラ体験は移民だけに限らず、彼らと出会う人々全てが経験するもので、常に他者を刺激し続ける。例えばこの空間内では彼らが原住民となり、イギリス人がディアスポラとなりえる事から、ディアスポラは我々の毎日の生活に常に存在する現象になっている。ディアスポラは、社会現象を示す言葉としてだけでなく、同一性に基づくナショナル・アイデンティティや植民地主義的二項対立に依拠するアイデンティティにとってかわる、新たなアイデンティティのありようを模索するための視点として、また、そうした旧来のアイデンティティのもつ排他性を克服する戦略として、論じられるようになってきた。近年使用されるディアスポラは大きな移動から様々な体験をし、「多元的で柔軟な視点」(戴 同上 : 113)を養う重要な場所である。では、このような視点はどのようにして文化的表象となるのであろうか。

(c)ポストコロニアル文学の発展

多文化主義概念が実際に機能していない状況にも関わらず、その概念を二大政党が争点にしていたという影響もあり 1977年に人種平等促進委員会が設立され、それ以降は同化的要素が放棄されはじめ、イギリスでは多文化社会になりつつあった。ディアスポラの体験をした移民の人々は新しい価値体系を形成し、自分たちを表象するという表現の自由をもつことが可能になった。文学界での最高の榮譽の一つであるブッカー賞受賞者をみると、文学界でも多文化主義が進みつつあることがわかる。1980年代には多くの有名な著作がでてくる。西インド諸島旧植民地トリニダット出身の V.S. ナイポール、階級社会を描いた日本人移民のカズオ・イシグロ、インド人移民のサルマン・ラシュディ、パキスタン移民のハニフ・クレイシなどである。(Christopher 1999:50-53)

例えば、ラシュディの『悪魔の詩』(1990)がその内容の冒険性でイスラム共同体に批判され死刑宣告を受けた事はあまりにも有名だが、その内容は多文化主義で必要とされる「ハイブリッド性」に関するものである、と彼はその重要性を以下のように説く。

この小説に反対を唱える者たちは、異種の文化と混ざりあう事が必ず自分たちの文化を弱体化し、衰退させると考えている。私はそうは思わない。『悪魔の詩』は、ハイブリッドであること、何か異質のものが混ざっていること、混ざって溶け合うこと、そして人間でも文化でも、また思想、政治、映画、歌においても、異種のもの同士が混合することによって新たな予期せぬものが生まれていく転換を賞賛しているのだ。つまり雑種化することを喜び、純粋なるものの絶対化を恐れる。混ぜたり、寄せ集めたり、あっちこっちから少しずつかき集めたりすることによってこそ、新しいものが世界に登場するのである。大量移民が世界に与えるものこそ大いなる可能性なのだ。『悪魔の詩』は融合による変化、結合による変化の賛歌である。(Rushdie 1991:394、邦訳コーエン 2001: 211)

彼の意図は、ホールが示す「ハイブリッドな文化」(1998)の促進である。それぞれが異なる伝統を持ちながらも、同化することも過去をすべて捨てるということもなく、古いものと新しいものが調和している状態である。また、先述のバーバが述べた「第三の空間」の可能性への賞賛そのものであろう。こうした文化の成長は、植民地化の経験やポストコロニアル時代の移住により形成されたディアスポラに密接に関連していると考えられる。(コーエン 同上: 214)

文学界だけでなく映像界でも自分たちの現実に根ざしたものを見たいという欲求が高まる。ハニフ・クレイシは 80 年代を代表する作品、「マイ・ビューティフル・ランドレット(My Beautiful Launderette) : 1985」の脚本を書き話題となった。大都市ロンドンの有色人種が多いディアスポラ空間を舞台にしたパキスタン人移民の日常とポストコロニアリズムを描いたドラマ・ドキュメンタリー映画である。暴動や移民排斥運動が真っ只中のイギリスにおいてリアルタイムな社会問題を軸に“現実”を描いている。特に移民と労働者階級の関わりを描いたことが国内問題にメスを入れる形となった。もともとイギリス労働者階級の外国嫌いは他国の比ではないといわれており、彼らのアイデンティティは他者の排除することにより成立しているところが大きいとされる。作品では異なるマイノリティの集団が織りなすハイブリディティが描かれる。詳しくは次章にて考察する。

周縁として境界が不明瞭な移民と労働者階級の若者たちが共有しはじめた音楽が発端となり、ファッション、文学、映画を通して変化が起きていった。人々が実際にディアスポラ経験をし、アイデンティティの再認識とともに融合されたハイブリディティを創造していくことは多文化主義を目指す国家には重要である。周縁化されて抑圧されてきた移民の人々が取ることのできた唯一の文化形成が「自分たちの文化」の再創造である。毛利(2001)は、そういったレゲエなどの「黒人文化」は人種主義に対抗する政治的アジェンダにも関わらず、常々無秩序な暴力や脅威として表象されてきたとしている。80 年以降の移民たちがいかに表象されていたのか、また英国社会における特異な階級とどのように関わってきたのかを考察していく。

II. 80年～90年代の移民の表象について

(a) 労働者階級との境界

移民たちがディアスポラな空間で自分たちのアイデンティティを再構築してきた事は、イギリス人もディアスポラ体験から選択すべき新しいアイデンティティの可能性を気づかせることとなった。例えばロンドンにおいて毎年8月に行われる有名なノッティング・ヒル・カーニバルというものがある。現在ではヨーロッパ最大の祭りで、様々な人種、年代の200万以上の観光客が集まる平和な民衆文化となっているが、この起源は人種暴動であり、また、90年はじめ頃までは黒人、白人警官、人種差別主義者の激しい衝突の場として有名であった。差別を受けていた西インド諸島黒人の結束と自分たちの文化が中心となる祝祭の機会であり、抑圧からの転覆と解放の場であった。ではそれがいかにして大衆文化の一部へと変化したのであろうか。

肌の色に基づく人種差別を行ってきた白人の認識に変化が現れたのは、移民を排除する傾向が最も強かった白人労働者階級の若者からである。移民と隣り合わせの生活を送ってきたイギリスにおける貧困と社会問題の筆頭である労働者階級の人々はレゲエ音楽や言語、ファッションを通じて係わり合いを持つようになる。ジャマイカン・クレオールという独自の言語は音の欠落や変形が特徴で、これらの言語を使用することは抑圧された黒人としての抵抗の意味合いが含まれた。彼らの文化にはラスタファリアリズムという独自の宗教思想が組み込まれているが、この思想自体が貧困や奴隷制を基本に作られており、苦しみを描写する象徴としての言葉であり、新植民地支配体制に抵抗する意味が重要となる思想なのである。(Storry & Childs 同上: 229-31) ラスタファリアリズム思想を反映しているレゲエ音楽をきくことは、黒人たちにとっては抑圧からの開放とノスタルジアを共有することで結束が強まる場所である。労働者階級にとっては、人種という問題に抵抗しながらもレゲエ音楽に魅せられ、言語文化とラスタファリ思想に自分たちの生活状況を重ねるといふある種の親密性が形成される場所になる。

ハイブリッドなアイデンティティ形成の過程において移民に対するコンプレックスの形成と労働者階級の解体という2つの現象は相互に関連し合っていたように見える。労働者階級は、イギリス社会で起きた移民急増による労働市場の変化、脱工業化による熟練労働の解体とそれによる労働者階級居住地区の離散化などの中で、伝統的な共同体の内部で培われてきたアイデンティティを保つ事ができなくなっていった。脱伝統化は過去の束縛から人間を解放しアイデンティティの再構築を自分自身で行わせる。それは親世代の文化と

の切り離しと対立、そして移民文化である黒人文化との接触や対抗、折衝する機会が増加する事である。労働者階級の若者たちは地下のクラブなどで独特な黒人文化との親密感を確認し真似してみたり、伝統的な労働者階級の社会が持つ関心事や強いテリトリー意識、外見のタフネスさと男らしさというイメージに黒人社会から取り入れた要素を融合させ、モッズやスキンヘッズなど自らのスタイルを作っていた。(ヘブティジ 1986 : 79-88)

ディアスポラ体験によって異質性や他者性を認識し、新たな差異を積み重ねて、それぞれの意味を寄せ集めていく事によりハイブリッドなアイデンティティが形成される。本来ディアスポラ体験のない労働者階級のハイブリディティ性を考える上で重要なのは、西インド諸島黒人労働者とイギリスの労働者階級が共有する抑圧と搾取、差別などの共通認識である。彼らがある意味で共通の社会空間を共有したということはハイブリディティの対話の機会を持ったということになる。黒人が意図的ハイブリディティをもった経過である「共通の経験が新たな組織を作った」ことを考えると、黒人と労働者階級が相反しながらも強い連帯感を持つことは可能であろう。

(b)80年代パキスタン人移民の表象

80年から90年代に作られたイギリス映画には移民を題材にしているものが多くある。それまではイギリスといえば、上流階級を描いたヘリテージ映画 (Heritage) と労働者階級の日常をドキュメンタリーで描いた映画の2通りが代表だった。しかし近年は主要移民集団である黒人、インド人、パキスタン人の日常と葛藤を描いたものが多い。その理由としてはサテライト放送の発達と新規参入の民放会社の影響をあげなければならないが、イギリス人として多人種が日常生活においてみられるようになったという社会変化を考慮する必要もあろう。(Christopher 同上)

前章でも少し触れた『マイ・ビューティフル・ランドレット・My Beautiful Launderette』(1985)などの低予算で作られ地味ではあるが、現実に根ざしたリアルな映画の復活は1980年以降からである。1982年に開局したイギリス2番目の民放TV局「チャンネル4」が劇場公開映画の製作も始め、それがきっかけでイギリス映画界に活気が戻る。また、イギリスではそれまでテレビの作品は放送規定によって劇場公開ができなかったが、サッチャー政権による競争原理導入の政策によって、解禁になったことも上記作品が80年代を代表する映画として大成功した理由の一つでもある。(狩野 2005:439-42,543)

あらすじ：舞台はロンドン南部の有色人種が多い貧困層の地区で、主人公はパキスタン人のオマール。彼はパキスタンを知らずに育ち、英語しか話せない移民二世である。彼は叔父ナセルが経営するコイン・ランドリーの後継者となる。オマールは店の共同経営者として古い友人のジョニーを選ぶ。彼は移民排斥運動に参加経験もある白人労働者階級である。互いに友情と人種問題の狭間に直面することになる。様々な社会問題を背景に移民と労働者階級の関わりを鋭く描く。社会の底辺にいる者同士、そして差別されている同士のいがみ合いの発生と一時鎮火の日常化をあらわす。そこにある何も変わらない差別の社会と暴動の中に生きなければならない淡々とした現実を描く。

歴史的背景から移民共同体内には移民二世という生まれも育ちもイギリスであり、文化や価値観がイギリスにおいて構築されているという人々が日常的に多く存在している点が上げられる。父親の代までは伝統的な愛国意識や共同体意識から成るアイデンティティが随所に伺えるが、二世になるとアイデンティティの基盤が異なるため、世代間の変化が表れてきている。オマールにとってイギリスは自分のアイデンティティの大部分を占めるものであり、しかしそれと同時に「他者」でもある。

ホールはアイデンティティについて、他者のまなざしの中で形成され、常にプロセスとして捉えられるものであると述べる。個人というものは他者の眼差しによって排除されることを意識したり、又は排除されていることを自己の中で打ち消すという選択の可能性を持ちながら、他者との関係の中で自己位置を決める。またアイデンティティは常に過程なので完成形はなく、状況に応じて変化するものなので複数のアイデンティティフィケーションの共存が可能だと説く。ギデンズも複数のアイデンティティを「部分的アイデンティフィケーション」と呼び、その共存をハイブリディティという概念で示した。(ホール 2001 : 22-26)

オマールには英語が母国語として誇りを感じているイギリス人であり、一族のつながりや関係性を重要視するパキスタン人でもあり、父とは異なる道を歩もうとする移民という3つのアイデンティティが共存したハイブリディティをもつ。そのことが彼の食欲さや一族への文化的礼儀などから確認できる。彼は空間を共にする人によってその自己位置を変化させるという融通性もあり、常に複数アイデンティティの共存を示す。

白人労働者たちと移民が境界線上で関わりの中、差別の主体である互いを照らし出す。移民であるパキスタン人は店を持ち、白人に対して麻薬なども含めて商売をして成功して

いる。労働者階級にとって彼らは移民であり、非白人なので差別に値する人々なのにも関わらず自分たちよりも上方に位置しているのが許せない。パキスタン人を「パキ」と罵り、「なぜパキのために働くのか?」、「あいつらは、俺達が使うためにこの国へ入れたんじゃないか」、「イギリスを裏切るのか」などと発言する。実際に労働者階級の若者が強い人種的感情を抱く時に、西インド諸島の黒人たちよりも体格的に遥かに劣るインド人やパキスタン人の方を選んで殴りつけることが多い。これはパキ叩き(paki-bashing)と呼ばれる労働者階級内で行われる儀式である。ここで、階級制度により白人としてのアイデンティティ観念から解放されているはずの労働者階級が「異文化」との接触により、白人として他者を差別するという伝統復古が強調されている。

しかし労働者階級はイギリスでは差別される側である。英国社会では彼らは「別のもの」であり、既に異なる人間の分類されている。19世紀後半に首相で保守党のベンジャミン・ティズリーが、「英国には二つの国民が存在する。両者の間には交渉も共感もない。そのどちらとも他方の習慣、思想、感情を知らない。まるで異なる地域、或いは異なる惑星に住んでいるかのようだ」と発言している。(トッド 同上:160)これは労働者階級とそれ以外の階級は人種間の違いと同じくらい距離があることを意味する。彼ら自身もその自覚はあり、自分たちを“おれたち”その他の階級人を“やつら”と呼び完全に区別する。既に階級の差別主義で底辺にいた労働者階級領域内で移民が接触してきた時、彼らは帰属意識の強い伝統的なアイデンティティを維持するために差別をし、そして移民が彼らに対抗した時に人種差別を高めて排除や闘争へと発展させる。差別される主体であることを、お互いに「他者」を通して認識していく過程である。

映画の中でもオマールとジョニーが麻薬で資金集めをし、店を派手に改築した事が成功であり、一方白人労働者階級が不法占拠や毎日何もせずくすぶる様子を社会の悪としてとらえる。相互の差別感情が刺激となりリンチにまで発展するのだが、こういった争いと鎮火は現実社会でも日常的なもので、境界線上で生きる彼らの間にある隔たりは消えないことを示すのであろう。

しかしハイブリディティの概念では闘争と対話への可能性を含む。共通の社会的空間の共有とはディアスポラ体験であり、そこで構築した新しいアイデンティティが対話を可能にするだろう。ホールはこの映画について、テキストがジェンダー、人種、エスニシティ、セクシュアリティそして階級のあいだの境界を交差させている点と、登場人物が自らの行う行為を知覚している点を高く評価している。(ホール 1998:80-89) 1985年という年を

考えると、イギリスが多文化主義へ進み始めた時、まだ理想と現実の間で揺らいでいる不安定な社会を反映した映画である。

(c)90年代西インド諸島黒人移民の表象

次にあげるのは、労働者階級と黒人との交流を描く『**秘密と嘘・Secrets and Lies**』(1996)という映画である。この監督は常に労働者階級を描きつづけてきており、この作品に至っては“イギリス人らしさ”の例として、オスカー受賞者のスピーチであげられたほどである。(Mettler2003:35 Sunday Express)

あらすじ：舞台はロンドンの貧しい労働者階級居住地区に住む工場労働者の白人中年女性シンシア。自分が20年前に捨てたという娘からの連絡で会ってみると彼女は黒人だった。自分の子供が黒人であるという事実を受け入れられず、拒絶しながらもゆっくりと交流が始まり打ち解けあっていく過程と人種問題に対する個々の反応と家族愛を描いていく。周囲の白人労働者は単純労働者層に位置する人々である。黒人女性のホーテンスのみが大学を卒業し学位も取得し、検眼師という専門職に就いている。あるきっかけで自分の子供であると告白してから家族中が大騒ぎになり一時は壊滅状態にまで陥る。しかしそれを境にそれぞれが持つ秘密と嘘が明らかになり、絆が深まり日常の平和を示唆して終わる。

ここで、たった一人白人以外の登場人物が黒人女性ホーテンスである。彼女は最後まで冷静沈着な態度で、常に人を気遣う対応をしており、白人労働者たちとはすべての面に対照的に描かれている。以下、比較のため重要だと思われる点をあげてみる。

第一にあげられるのは言語の違いである。英語の発音はイギリスではかなり重要で階級によって言語が区別されている。労働者階級は独特の言い回しや訛り、音の脱落などがあり、アメリカの黒人英語に匹敵するほどの社会的方言である。話し言葉は個人間の相互行動を表現するもので、アメリカでは人種の差を定義し、イギリスでは階級の差を定義している。(トッド 同上：160) ホーテンスは労働者階級の母親と名も知れぬ黒人を父親とする私生児であるが、養子として中流家庭で育てられており、教育を受けてきた「知識人」の英語を話す。また、表現の方法も対極的で、労働者階級は感情的で自己表現能力に乏しいのが明確になっている。周囲に気を遣わず、また使う余裕がなく、常にかん高い声でしゃべりつづける様子と自分の想いを相手にうまく伝えられない様子をとところどころに織

り交ぜて描く。

第二には、この映画では2種類の人種の交差が見られる。白人と黒人という“肌の色”からくる人種と“言語”から判別するイギリス独自の社会階級としての異なる人種。全てを対照的に描く事により差異をはっきりと際立たせている。物腰や表情、ファッションやレストラン、手土産の細かいところにまで階級差をはっきり出すことによって生物学的な人種差別に疑問を投げかけている。今までのステレオタイプ化された「黒人」とは対置させ、逆転する位置づけを試みていることにより、イメージの転換を図るとともに、そういったことが既に非日常的ではないことを示しているといえよう。

ホールは、西インド諸島の黒人に焦点をあてた研究をしているが、英国社会における黒人の周縁性と単純化、ステレオタイプの特質をもつ今までの表象に批判的で肯定的な黒人の形象を対置することによって異議の申し立てを可能にするとしている。それはまさにこの映画での逆転する位置づけにあたるのではないだろうか。黒人主体の表象に変化があると、人種に関わる問題が断片化されて表面に出ながらも、同時にその他の異となるカテゴリーによって絶えず交差、再交差がなされるという事である。このような様々な問題を取り扱う映画は、黒人主体の問題の移行とその問題が階級、ジェンダー、セクシュアリティそしてエスニシティの諸次元への言及なくしては表象されえないものであることを明らかにする映画だとホールは定義している。(ホール 1998 : 80-89)

イギリスの映画専門紙では、この映画の主人公は白人の労働者階級であることを示唆するコメントが掲載されており、人種、階級、家族の問題を再確認させる。

A film that showed that a middle aged woman could become a star, but that a British Black actor would have more trouble finding other starring roles, no matter how well she performed in this film (Pictureville: British cinema 11)

この記事はほぼ中流階級に近い日常生活をしている、成功した黒人として表象されているにも関わらず、黒人であるがために今だ周縁として役柄が固定しているという異議の意味を含むものと考えられる。

しかし、イギリスではもはや移民や人種の問題を、コンプレックスの裏返しの強烈な自己主張などすることなく日常的に淡々と作品に取り入れることが可能になったことを示すものでもある。人種、階級だけでなく白人若年層での社会問題であるシングルマザー問題

も交差させており、現代ではその一つ一つが重要なテーマであると実感させられる。

(狩野 2005 : 452)

このような多人種、多文化社会を描いた映画やTVドラマは90年代にはピークになっている。西インド諸島黒人、パキスタン人、インド人コミュニティを描くものに共通していることは、白人に何かを主張しているとか対抗するというものではなく、自分たちのコミュニティでも世代を含めた様々なアイデンティティの存在を再確認しているものであろう。そしてそれらは常に前向きで大きな可能性を秘めており、ハイブリディティの重要性を表象しているといえる。(Storry & Childs 同上 : 231-32) このように、ディアスポラ的な経験を通して、移民だけでなく労働者階級内でも個々人の間に存在する異質性や多様性を認識し、ハイブリディティ性を受け入れる社会的な風潮が構築されたと考えられる。

Ⅲ. イギリスの労働者階級映画

(a) 伝統的な表象

ドキュメンタリー形式で現実的な日常を表現する映画は 1930 年以降から始まり、現在に至ってもイギリス映画の大きな特徴として挙げられる。映画には当時の社会生活の現状を忠実に表わすことで、社会を向上させる使命がある、と考えられていた。中流階級によって社会的病理問題として取り扱われ、常に社会学的調査がなされ、政府報告書によってその現状を描きだされてきたのが労働者階級といえよう。

伝統的な労働者階級として表象とは、知識資格のない肉体労働者であり、地域アクセントで話し、行動範囲が常に狭く、共有経験を大切にするというものだ。それが、イギリスの労働者階級に属する人々是一个の集団に属するという帰属意識が強いといわれる所以であろう。労働者階級出身の著名な学者リチャード・ホガートはこの意識を“*We are all in the same boat*”と表現し、まさにボートのように一个の狭い地域の中で日常生活が営まれてきたことを述べている。濃密な共同体意識は労働者階級の社会生活から生まれ、彼らのアイデンティティの一部となった。彼らの団結というものは同じラインにたつこと、すなわち他より抜き出ないことを重視する平等意識のもとで支えられていた。それは、その貧しさゆえに互いに助け合わずには生きてはいけなかったという社会状況が彼らの連結を強固にしていたためであると思われる。

新しいものに対して常に保守的で閉鎖的な彼らは、イギリス社会が工業以後時代に突入するやいなやその変化に追いつく事が出来ず、共同体の解体とともに彼らに生きる意味を与えてきた全てのものが打ち捨てられてしまったために、生活基盤は犯罪の温床へと変わっていった。(ブルック 2004 : 56-58) イギリスの労働者階級映画は彼らの生活の貧困と仲間意識を軸に、ドラッグや暴力などの社会問題を忠実に描いてきた。

ドキュメンタリー映画形式で有名なケン・ローチ監督は一連の作品において労働者階級が日常的に直面するだろう問題を鋭く描き続け高い評価をうけている。90 年代の代表的な作品 3 つについて触れてみる。

「レディバード、レディバード・*Ladybird, Ladybird*」(1993)は男性からも福祉局の係員からもひどい扱いをうけるシングルマザーの話である。家庭内暴力の被害にあい続け、社会福祉局によって母親失格と判断され 4 人の子供の養育権を奪われる。労働者階級の男たちは感情抑制が出来ず、暴力がアルコールとの相乗効果で犯罪になるケースが多く、イギリス映画で見られる現象である。この映画でのわずかな希望は彼女が出会う政治亡命をして

きた男性である。世間では重荷とされる互いが助け合いながら社会底辺を生活していく様子は労働者階級の共同体を思わせる。悲観にくれる主人公たちに味方することなく淡々と低い目線から見た社会を描く。撮影開始直後から社会福祉という名のもとにある官僚的制度を告発している映画としてこの作品は話題をよんでいた。(狩野 同上：40)

「リフ・ラフ：*Riff Raff*」(1994)は工事現場で日雇いしている労働者階級の中でも下層市民であるギャング達が直面する深刻な地域問題—地域の病院を取り壊し、立派なマンションを建てるという上からの命令—とその葛藤を取り扱う。彼らの日常生活はアパートの不法占拠によって成立しており、仲間同士で助け合いをしているが、規範の存在がなく麻薬との距離感が常に近いことがわかる。不当な労働条件で働く彼らは、待遇改善を要求すると即座に解雇され生活ができなくなるような選択肢はないに等しい状態におかれている。仲間の死と何も変わらない毎日に怒りを心頭させビルを放火してしまう様子が描かれている。ここでも、彼らには感情抑制は困難でいつも犯罪と隣り合わせの生活があるということを表示しているといえよう。

「マイ・ネーム・イズ・ジョー：*My Name is Joe*」(1998)は過去にアルコール中毒で殺人を犯し、病気から回復して普通の生活をしていたジョーという男性が主人公である。ある下層中流階級女性との恋が進行しているが、彼は仲間の命を救うために麻薬運び屋のアルバイトを請け負わずにはいられない事情がわかってもらえず彼女との関係を失う。しかしその仲間もジョーへの償いを考え、感情的かつ情緒不安定になり自殺を図る。底辺にいるものにしか理解不可能な社会状況と人間関係、そして大切な者たちを失ってしまうという彼をとりまく非情な社会底辺を描く。

これらの作品で共通の特徴は、社会的犠牲者とされる人々を理想化することなく、冷徹に、時には同情的に描き、犯罪に手を染めないと生きてはいけない人々や社会でのマイノリティの存在を再確認させる点である。彼らには「未来」がないという叫びと社会に対する強いメッセージが含まれているといえる。

(b) New Realism 映画

90年後半からローチ以外の監督による労働者階級を扱った作品が出始め、国内外で高い興行成績を収め始めた。これらは New Realism 映画と呼ばれ、従来からの労働者階級の伝統を軸にしているものの、ローチ作品にみられるような深刻な悲慘さが減り、労働者階級の日常生活に楽しさや希望を見出されている。その上で社会問題は核心として取り扱わ

れながらも前向きで現実的な視点が特徴的である。(Christopher 同上)

「Le Monde diplomatique」という映画批評を取り扱う新聞に、新しい労働者階級のヒーローとして90年後半から続出したいくつかの労働者映画について、90年前半の映画の重苦しさを述べたあとで、その変化を以下のように評している。

I don't know I 'd pay five pounds to get this depressed. The new working class audiences want to see themselves on screen, but they want to do so in an enjoyable, positive context· a context what has often been absent from films in the past.
(*Le monde diplomatique* 1997)

これらの変化は労働者階級自身のアイデンティティの変容とどのように関連しているのだろうか。そしてそれはどのように映画の中であらわされていたのか。

労働者階級を描いた作品の多くはイングランド北部を舞台にしている。北部には炭鉱業が発展していたので労働者が多く居住しており、工業化以後時代による過疎化、失業や犯罪などの影響が最も強く見られる地帯であるといえる。実際に、「ブラス : *Brassed Off*」(1996)、「フル・モンティ : *Full Monty*」(1997)、「リトル・ヴォイス : *Little Voice*」(1998)などいずれも北部のヨークシャー地方や海辺の過疎化した町が舞台となっている。これらの映画はそれぞれ、炭鉱閉鎖の危機がいかに彼らの生活を破壊していくのかを問い、過疎化した貧しい街で失業によりもたらされる喪失感にさいなまれながら、人々が自己の価値を維持しようと努力する姿を描き出している。

そこでは伝統的な労働者階級の粗暴さや男らしさから構成されている“アイデンティティ”が崩壊していく様子が描かれる。「ブラス」と「フル・モンティ」では失業者たちがその中心となっているので、「男らしさ」がある意味で欠落しており、余り者として取り扱われている。伝統的に描かれてきた絶対的な男の権威というものが失業という経済的理由で断片化され、もはや機能していない。(Kirk 2002 : 16-20) 「リトル・ヴォイス」でも女性の芸術的才能とそれを様々な角度からサポートする男性を描く。

アイデンティティの変化とともに何かの逆境に立った時にそれをどのように受け止め、消化していくのか、そして自分たちの居場所を探し出すべく努力していく姿を新たに描き始めたのが90年後半の新たな映画といえよう。労働者階級には階級アイデンティティによって白人アイデンティティ観念から解放されているとトッド(1999)が表現したように、逆境

は彼らに移民たちとの類似性を再確認させ原動力へと変換させた。それは移民が周縁のパワーとして新たな対抗の可能に気づいていったような、前向きな力である。

(c)映画「リトル・ダンサー：Billy Elliot」(2000)

あらすじ：1984年のイングランド北東部ダーラム州の炭田地帯を舞台に描かれた作品である。主人公は11歳のビリー・エリオットで、父と兄は炭鉱労働者で現在はストライキの最中である。母親は既に亡くなった。ビリーはボクシングの練習中にバレエと出会い興味を持ち始め、先生のサポートもあり、親に秘密でバレエの秘密練習を毎日する。反対していた父親も彼の踊りを見て才能を伸ばしてあげたいとストから身をひく覚悟までする。家族と組合のサポートでロンドンにロイヤル・バレエ劇団のオーディションを受けに行く。見事合格して、15年後に立派になり舞台に立つビリーを家族が見守る。

①アイデンティティの多様化

労働者階級の伝統的な共同体意識やアイデンティティが新たな世代ではうすらぎつつあることをこの映画は率直に認めている。ビリーはボクシングの練習中に脇で練習しているバレエ教室の女の子達が気になって仕方がないのは、異性に興味があってというものではない事が直後にわかる。それはビリーが居残りレッスン中に、バレエ・シューズを借り女の子達に混じって平気で踊り始めるからである。これは親友マイケルにも当てはまる。姉の服で女装したり、バレエのチュチュに興味を示したり、それを着用して喜んでビリーと踊るのだ。伝統的な男らしさをアイデンティティとして持つ父と兄、バレエや女装に興味をもつ新しいアイデンティティをもつビリーとマイケルの描写は、労働者階級内でもアイデンティティが多様性にみち、変容しうる可能性を示唆している。それを裏付けるようにビリーは伝統からの脱皮と異なるものとの接触を経て、クラシックなバレエではなく自分なりのタップダンスステップを創造している。それは「内面の憤りがほとぼしる激しいステップ」であり、「男性的」でもある。(狩野 同上：476) これは融合された新しい世界観の形成であろう。

②アイデンティティの変容

頑なに伝統を守ってきた父親がビリーのハイブリディティと自己のディアスポラ体験を通じてそのアイデンティティが変容していく。「男はサッカーやレスリング、ボクシングを

するものだ」と話している途中に、ビリーに「どうして?」「かっこよく、男らしい踊りをするよ」「なぜ男はバレエをしてはいけないの?理由を教えて」と聞かれて、何も答えられずいらだつ様子が描かれていた。それは父親が伝統的な考えに縛られてきていただけに過ぎないと気づく契機でもあるだろう。ギデンズが伝統を守ることについて「中毒と同じで凍結した自主性」と述べており、伝統に縛られている間のアイデンティティは安定しているが、それがゆらぐ時に自我の確立が避けられないので、能動的にアイデンティティの再構築をしなければならないとしている。(ギデンズ 2001: 96-100) 母親所有のピアノを破壊する行為はノスタルジアへの訣別と考えられ、彼がこれまで以上にアイデンティティを構築するための新たな行動に出たことを示す。それは、移民黒人たちがノスタルジアを共有して結束を強めていった行動と対極であるこの父親の行動は労働者階級の伝統性からの脱皮と自主性の解凍への契機とみられないだろうか。後にそれを裏付けるような行動に出る。労働者階級というものはストライキという悲惨な状況にあっても自分たちのプライドは労働者階級であることを固く信じ、息子にも自分と同じ道を望むものだった。しかし、父親がビリーへの資金援助のためにスト破りをして共同体を裏切ったという行為は伝統を重んじた共同体内ではありえない選択であった。

それはホールのいう「ディアスポラ・アイデンティティ」の模索と重なるものがある。「同質性に基づいた固定したものではなく、文化的差異と不連続性に満ちた流動的なもので個々人の間に必ず存在する異質性や多様性を認識するものである。」(ホール 1990) ここにあるのは、その基盤を失った労働者階級というある種のディアスポラ空間の中で中流社会との息子の才能を通じた接触を期に、工業化以後に取り残され本来の枠組みではとらえきれない自己の現実と直面する新たな主体のイメージである。移民同様に自分なりのディアスポラ・アイデンティティを労働者階級も自己を模索して構築しなければならない。それは脱伝統化が自由化を促すものと類似しているといえる。伝統的な労働者階級アイデンティティにこだわり続けた結果、新たな表象や言説に出会い変化せざるをえなくなる彼らは、それまで差別されてきた移民に新たなモデルを見出しているのである。それはディアスポラ・アイデンティティという考えが「同一性から自己を解放するための思考の枠組みを提供する」(戴 同上: 126)ものであることからもうなずけよう。これにより父親は状況を冷静に判断し 11 歳の子供の将来を真剣に考えるようになっていくという変化が生じる。

③階級意識と文化の越境

階級意識についても「対立」から「対話」へという、ハイブリディティの可能性が見出されている。父親とバレエの先生の激しい言い合いすら伝統では存在しないものだった。常に階級境界がはっきりとしており、自らのコミュニティ内でのみでしか自己存在の確立ができない労働者階級にとって、中流階級は接触し交流するはずのない他者なのだ。映画では「この、中流女！」と直接罵声まで浴びせ掛けて本格的な「対話」ともいえる状況が存在している。父親と兄はバレエを「中流のお遊び」とばかにして、家にあったピアノを壊して、芸術に対して反骨精神を見せていた。一方、バレエの先生は冷静に曇りのない眼でビリーを観察しており、その才能を開花させるべく惜しみない協力を続ける。

オーディション会場では、上流と労働者階級の違いを明らかにしながらも、ビリーと他の受験者との共通の経験が示されている。1980年代のサッチャー政権時代に合理化のため、政府からの補助金が徹底的に切られた分野が炭鉱と芸術である。これらは普段は交流などない両極端の異世界なのだが、どちらもこの切り捨てによって苦しめられたという共通の経験があり、二つの国民の連帯を意味する。(狩野 同上：478) 移民たちが共通の経験でカウンター・ヘゲモニーを作っていたように、上流階級にも「他者」の中に「自己」を認識させる契機であり、周縁化されたカテゴリーは多様性を含むもので、階級を越えても可能であるという意味を示唆しているのではないだろうか。

異人種である2つの階級の交差は多文化主義の英国においては必ずしも珍しいものになるとしても、労働者階級の、しかも炭鉱家族が文化の境界を越えるというかつて前例がないものである。今までの伝統的な労働者階級にとっての文化越境はサッカーなどのスポーツであったが、それが芸術という知的分野にも可能であると指し示す新たな例であるからだ。15年の間にビリーがいかに困難を乗り越えてきたのか、そして田舎に残された家族や共同体の関係はどのようになったのかといったことは明らかではないが、環境や階級に関係なく努力や才能があればどんな越境も可能にするのだというような、労働党が掲げる実力社会と階級なき社会の社会思想的メッセージ性も含まれているとも考えられる(Kirk2002：22-3)

社会思想とは別に、15年間のビリーの葛藤は安易に予想がつく。しかし敢えて触れていないのは、それがただの苦労話となり個人レベルの物語として理想化されてしまう恐れがあるからだろう。映画は個々人によってディアスポラ体験が異なり、そこから派生するハイブリディティ構築が様々な形をとることを認めつつ、困難な越境を前向きに表象する

ことで、人々に新たな希望を与えると共に、ディアスポラの重要性、そして自己の中のハイブリディティを認識しながら生きていくことを推奨する。

階級に対抗することのみにより自らのアイデンティティを創り上げようとする消極的な態度ではなく、自分たちの心底から求めるものを自分たちで発見し、その上で厳しい現実立ち向かう意欲を描いている点で、90年前半までの現状を忠実に描き、それが彼らの限界であるというメッセージをこめて、変化や希望をあきらめていないような労働者階級の映画とは一線をひく作品といえる。

(d)労働者階級と多文化主義

90年以降の映画を労働者階級の創造的エネルギーの発信として見ると、その源は移民黒人たちと考えられる。ホール(1998: 123)は移民黒人として周縁を生きる人々の間に生じた変化を、周縁そのものがもつ膨大な創造的エネルギーが表面化していったとして、「周縁的な経験がまさに圧力鍋の役割を果たすようになった」と述べている。これと同様に労働者階級として周縁に生きている者たちが、犯罪や不確定な未来を考えながら過酷な状況を生き延びなければならない経験を、その場所に留まらせるだけでなく、一つの共同体としてのエネルギーを異なった形、「新しい人間として生まれ変わるような体験」へと変換させていく重要性を一連の労働者階級を扱う作品には見出せる。

そして、そこではバフチンの「有機的」と「意図的」という二つのハイブリディティがその役割を果たしてきたのではないか。黒人移民たちの政治闘争での移行過程と同様に、彼らは工業化以後の新たな労働者階級として、従来の表象への挑戦と新たな姿に価値を見出した。これは混交と融合から新しい世界観を生み出す「有機的ハイブリディティ」といえる。そしてその状態を維持しつつ、互いに批判し合いながら労働者階級の閉鎖された共同体の空間が広がり固執性が和らいだのであれば、これは閉鎖された空間を広げる「意図的ハイブリディティ」と考えられるからだ。

社会の底辺に位置してきた人々は自分たちで語りたいたいと思ってもその機会すら与えられなかった。メディアに映し出される自分たちを見て納得するだけで何かを変えようという意識すらなかったのが彼らの伝統だったからだ。しかし、多文化主義の導入による様々な「異文化」に接触することで、新たに見えてきた他者と自己の関連性、そして変容への意識が新しい労働者階級の居場所を造り出し、その結果、以前よりも前向きな創造的エネルギーを持った主人公たちを映画の中に見ることが出来るようになったといえる。

終章

階級制度が存在する特異な社会状況で、多文化主義という概念がいかに浸透していき、それがイギリスにどのような意味をもたらしたのか。この疑問に答える試みとして本論文ではいくつかの映画を参考に、移民たちの大量移住が多文化主義をイギリスに持ち込む契機となり、本来の意味での「多文化主義」政策を定着させる役割を担っていた点に注目した。それは労働者階級に伝統からの脱却を促し、国家変貌に伴う自らのアイデンティティ模索と再構築の機会を与える新しい波となった。知識人の美德としてのイデオロギーだけではなく、労働者階級にもディアスポラ体験を通して意識の変容が起こり、周縁から中心へ影響を及ぼした。それが現在の多民族国家、移民に寛容な国としてのイギリス自体の再生を可能にさせた。

最近では移民黒人の映画よりもアジア人移民の映画が多く輩出され、インドなどのアジア映画ブームがイギリス国内でも起こっている。多くの声のない主体たちの発信が可能になり、国民内部にもハイブリディティが形成された。イギリスにおいて多文化主義という概念が今後も確実に増加するであろう移民3世、4世に対していかに受容されるのか、そしてどのようにイギリス文化に影響を及ぼしていくのか大変興味深い。

しかし一方で、現在の多様な状況を「超多様性」Super-diversity として、多文化主義の再検討を警鐘している学者もいる。特にロンドン同時テロ以降、実行犯がイギリスで生まれ育った移民の子弟であったことから移民や差別問題の再検討が本格的に必要になってきているのも事実である。国民の人権に対する考え方も変化しており、個人の自由制限が正当化されるという強気な姿勢に7割の国民が賛成している。最近、隣国フランスで頻発している暴動において「移民」という共通な課題を持っているため、対策について比較検討されているが、フランスと異なり、「多文化主義」を絶対的原則としてきているイギリスが、今後移民たちがさらに経済問題や社会問題として深く関わってきた時に多民族共存をいかに受容していくのか。実際には「多文化」は民族の飽和とそれに伴う民族内ナショナリズムで「多分化」にもなりかねない状況である。例えば教育の分野では、分離教育や服装などが単にエスニック問題ではとどまらず、宗教や文化、ジェンダー、階級問題にまで発展する危険性をはらんでいる。そうなる統合を目指していた「多文化」が分解し「多分化」になってしまうのだ。多文化主義の両義的な「可能性」を考えることは、イギリス文化を研究していく際には重要な問題の一つであろう。